

ポール・セザンヌの絵画理論 「感覚の実現」を中心に

秋丸知貴（京都造形芸術大学大学院）

ポール・セザンヌの絵画理論として最も有名なものの一つに、「感覚の実現(la réalisation de mes sensations)」がある。

実際に、セザンヌ自身が「感覚が私の仕事の基盤を形成している」(1906年10月15日付息子ポール宛書簡)と述べている以上、この「感覚の実現」が彼の芸術の核心に触れるものであることは間違いない。

しかし、セザンヌは、自らの造形理論を友人や家族宛の書簡等で断片的に吐露するだけで、遂に完全な体系としてまとめることはなかった。そのため、その発言の曖昧性は多様な解釈を許容し、未だ統一的な見解は提出されていない。それでは、この「感覚の実現」とは一体何なのだろうか。

従来、この問題については部分的・抜粋的な分析が多く、またセザンヌの直接的な肉声のみならず間接的な伝聞資料(例えばエミール・ベルナル、アンブロワーズ・ヴォラル、ジョアシャン・ガスケ等の著作)も含めて考察されることが多かった。

これに対し、本稿は調査対象をジョン・リウォルド編集の書簡集(1978年版)に限定し、網羅的かつ総合的に関連証言を抽出することで、可能な限り本来の彼の芸術理論を再構成することを目指す。

要約するならば、従来あまり厳密に指摘されなかったが、絵画におけるセザンヌの「感覚の実現」は、印象の表現、つまり「気質(le tempérament)」を備えた画家が、自分自身の「感じ方(la manière de sentir)」に基づいて「自然(la nature)」を「モチーフ(le motif)」として眼差した時に生じる視覚的印象を、「絵画(les toiles)」上に「線描と彩色(le dessin et la couleur)」で「構成すること(les constructions)」と分析できる。

そして、新知見であるが、彼自身の「実現」すべき「感覚」は、まず何よりも「彩る感覚(des sensations colorantes)」、即ち「外光下(en plein air)」の強烈な照明光による反射光の強調がもたらす「対象の色面化」であり、それに続く「ある視覚的感覚(une sensation optique)」、即ち表象された色面を三段階の色調に分類する「色調の三分化」であると指摘できる。

さらに、彼の書簡からは、これに連続するものとして、「構図の集中化」「画面の平面化」「形態の抽象化」「色彩の純粋化」等の絵画思想も観取できる。

結論として、これらの絵画理念をセザンヌの実作品と照合し、彼の理論と実践に照応性があることを提示したい。特に、《モチーフへ出かけるマリオンとヴァラブレグ》(1866年)(V.96)《エスタックの海》(1876年)(V.168)《サント・ヴィクトワール山》(1902-06年)(V.802・V.804)《カードで遊ぶ男達》(1893-96年)(V.558)等を中心に考察する。